

令和 6 年 8 月 1 日

エンジニアリング協会 関係者の皆様へ

一般財団法人 エンジニアリング協会
専務理事

前野 陽一

関東甲信地域では、今年の梅雨入りは平年（6 月 7 日頃）に比べて、かなり遅かった（6 月 21 日）のですが、梅雨明けは平年（7 月 19 日頃）並みでした（7 月 18 日）。本格的な夏に入って、皆様お元気でお過ごしでしょうか。

ところで、今や **WEB** サイトは、対外的なコミュニケーションツールとして、重要な役割を果たしていますが、各種団体の **WEB** サイトを見ると、その内容もさることながら静止画像中心のものが多く、「これでは魅力を感じないなあ」と思ってしまう。当協会では、数年前に「エンジニアリング産業のイメージ画像が次々と現れる」**WEB** サイトに切り替えました。「結構いいものができたなあ」と満足していたのですが、一部の会員企業から、「**WEB** サイトの中身を見ようとすると、一番下までページをスクロールしなければ入れない」といったご意見を頂くようになりました。確かに、「使いやすさ」という点では問題があるかもしれない、ということに気づき、事務局の中で **WEB** サイトの作成に詳しい人たち（私は入っていません）が、新しい **WEB** サイトのデザインを考え、7 月に切り替えました。

ホームページの一番上に、「協会について」「イベント」「調査・研究・開発」といったメニューバーを設けました。更に、その下に「講演会」「PM セミナー」「刊行物」にログインできるアイキャッチバナーがあります。更に、その下には「新着情報」「直近の開催イベント」が掲示されています。

また、講演会のバナーをクリックしていただくと、「開催日カレンダー」があり、ビジネス講演会などがいつ行われるかが分かるとともに、開催日をクリックしていただければ、講演内容が分かるようになりました。

更に、「会員ログイン」をクリックすると、会員のメリットが一覧できるようになりました。

エンジニアリング産業のイメージ画像は無くなりましたが、より分かりやすく使いやすいWEBサイトになったと思います。是非一度ご覧いただければ幸いです。(https://www.ena.or.jp/)

また、現状課題を抽出し、優先度に応じIT等を用いた業務効率化を実施、実現するため、事務局内に「IT・業務効率化WG」を作り検討していることは、以前の専務理事レターでもお伝えしましたが、7月に、このWGから中間報告がありました。協会内からは、218件の改善要望が出され、その中で、192件については、規則の変更や追加の予算が必要なものではなかったため、WGの総意を経て直ぐに対応することとし、残りの26件については、「そもそも今のやり方を変えるべきかどうか検討する必要があるもの」や「現行の内部管理規則の改正や追加の予算が必要なもの」であるため、今秋を目途にWGおよび協会事務局でさらに検討を進めることとしました。

改善項目の中には、「そんなことで困っているのか」と思うものも多いのですが、これにより、協会事務局のメンバー一人一人が気持ちよく仕事ができる環境になればいい、と願っています。

以下、7月の主な活動についてご報告申し上げます。

[主要な活動内容]

1 講演会等の開催

7月には、2件のビジネス講演会と1件の事業説明会を開催いたしました。

8月は、多くの皆様が夏休みを取られるため、例年に倣い、講演会はありません。

なお、9月には、Zoom ライブ配信による講演会を実施する予定です。逐次参加募集を行う予定ですので、皆様のご参加をお待ちしております。

2 新旧国際プラント室長のご挨拶

7月1日（月）に、製造産業局国際プラント室長（正式には、国際プラント・インフラシステム・水ビジネス推進室長）としてお世話になった小川幹子様（通商政策局ビジネス・人権政策調整室長に栄転）と、後任の糸田香（くめたかおる）様が、当協会に、わざわざ異動のご挨拶に来ていただきました。

糸田様は、株式会社日本貿易保険（NEXI）からの出向ということであり、「世の中も変わった」と思った次第です。

3 会員企業トップインタビューの実施

7月4日（木）に、ブルーイノベーション株式会社の実質的な創業者（お父様が創業した会社の業務内容を変更）である熊田貴之様（代表取締役社長）のインタビューを行いました。

同社は、自律分散型の社会インフラを支えるロボット・システムのプラットフォームとして、少子高齢化に伴う労働力不足に対応し、人間が目視検査を行う膨大な作業コストを削減するとともに、危険個所における労働災害を防止するため、人間による点検・警備・保安作業などをドローンやロボットに代替させるシステムを提供されています。能登半島地震の復旧にも、大きな役割を果たされています。

また、7月17日（水）には、東洋エンジニアリング株式会社取締役会長で当協会の理事長もお勤めいただいた永松治夫様へのインタビューを行いました。エンジニアリング企業だけではないのですが、現在多くの企業にとって「人材確保」が大きな課題となっています。そこで、エンジニアリング事業に精通された方々に、エンジニアリング企業の魅力を語っていただくこととしました。来月には、同じく当協会の理事長をお勤めいただいた JFE エンジニアリング株式会社の大下元様（前代表取締役社長）にもインタビューを行う予定です。

4 在日オーストラリア大使館訪問

7月8日（月）に、在日オーストラリア大使館をご訪問し、エリザベス・コックス公使と三澤健太郎商務官にお会いしてきました。コックス公使は、昨年末私のインタビューをお受けいただきオーストラリアの魅力を語っていただきました。

実は、6月14日（金）に行った前駐豪日本大使の山上信吾様の講演を聞き、改めてオーストラリアの重要性を認識し、オーストラリアの経済や日豪関係に関し、ジャスティン・ヘイハースト（Justin Hayhurst）大使の講演を行っていただけないか、お願いに行っていました。

ヘイハースト大使は、日本に現在おられないということでしたが、コックス公使からご相談いただけることとなりました。

5 日本オイルエンジニアリング株式会社 新旧社長ご訪問

7月12日（金）に、日本オイルエンジニアリング株式会社の鈴木英壽取締役会長（前代表取締役社長）と森淳一代表取締役社長にお越しいただきました。

鈴木様には、私のインタビューをお受けいただいたほか、協会の事業に関してもご協力を賜っております。

引き続きのご指導とご協力をお願いいたしました。

6 2024年度 エンジニアリング功労者等表彰式及び懇親会の開催

2024年度エンジニアリング功労者等表彰式及び懇親会を、7月22日（月）に第一ホテル東京（新橋）で実施いたしました。

今回は、エンジニアリング功労者賞（グループ表彰）21件、エンジニアリング功労者賞（個人表彰）1件及びエンジニアリング奨励特別賞9件の表彰を行いました。

懇親会は、受賞された方々を中心にエンジニアリング企業の幹部の皆様のほか、ご来賓として、経済産業省の伊吹英明製造産業局長に加え、新任の国際プラント・インフラシステム・水ビジネス推進室長の糸田香様、更にはその前任の小川幹子様にもお越しいただき、「夏の賀詞交歓会」といった様相となりました。

7 国土交通省 海事局 宮武宣史局長へのご挨拶

7月24日（水）に、宮武海事局長をご訪問し、当協会の概要の説明を行うとともに、今後ともご指導を頂くようお願いしてまいりました。

7 その他

7月には、「選挙の月」であった印象があります。

日本では、7月7日（日）に東京都知事選挙があり、現職の小池百合子知事が再選されました。結果そのものはほとんどの方の予想通りだったのですが、一部候補者による異様な政見放送や選挙ポスターなど、選挙のやり方そのものの見直しが話題となった選挙でした。また、選挙後も、落選した一部の候補者の言動に世間の耳目が集まるなども特徴的でした。ただし、選挙結果だけを見ると、今後の日本の政治に大きな影響があるようには思えません。

これに対し、欧米の選挙事情は、全く違います。

最も大きいのは、米国大統領選挙における、共和党のトランプ前大統領への暗殺未遂事件と、民主党のバイデン大統領の選挙戦撤退でしょう。いずれについても、私は報道以上の情報を持っていませんが、次期米国大統領が誰になるかによって、日本に大きな影響があるのは避けられないでしょう（ちなみに、米国の世論調査によれば、約70%のアメリカ人が『バイデン大統領は、歳をとりすぎている』と思っていたようです。）。トランプ前大統領の当選の可能性が高くなったとして、『もしトラ』は『ほぼトラ』になった」とも言われる中で、「安倍総理なき日本」は、トランプ大統領とうまくやっていけるのでしょうか？

ヨーロッパでは、欧州議会選挙で右派（保守派）が勝利した後、フランスのマクロン大統領が突如下院を解散し、現在に至るまで、下院で首相が選任できていない状況が続いています（第1回投票は6月30日、第2回投票は7月7日）。

7月末から開催されているパリオリンピックは、テロリストの標的となりかねないイベントでもあり、「何かあった時に大丈夫だろうか」と心配になってきます。ちなみに、日本では「極右」と紹介される「国民連合（RN）」ですが、かつてと比べてかなり主張はモデレートになっているようです。イタリアのメローニ首相（極右政党とされる「イタリアの同胞」の党首）が、当初は「欧州で最も危険な女性」と警戒されていましたが、ロシアの侵攻に直面したウクライナ支援で米国や他の欧州諸国と足並みを揃える手堅い外交を展開している前例もあることから、フランスの「国民連合（RN）」も、政権につけば、手堅い政策をとるのではないかと、この見方もあるようです。

「国民連合（RN）」の主張は、マクロン大統領が進めようとしている「年金受給年齢の引き上げ」に反対するなど、むしろ、左翼連合の最大政党である極左政党「不服従のフランス（LFI）」と一致するところが多いような気がします（「EU 懐疑主義」も、両党の考え方が一致しています。）。フランスの場合、小

党が連合を組んでいるのでわかりづらいのですが、マクロン大統領の政策に批判的な「国民連合 (RN)」は、142 議席（前回の選挙と比べて 53 議席増）、「不服従のフランス (LFI)」は、74 議席（前回の選挙と比べて 5 議席増）である一方、マクロン大統領が名誉党首を務める「再生 (RE)」は、102 議席（前回の選挙と比べて 31 議席減）となっており、マクロン大統領の賭け（snap election）は、現時点では失敗ではないでしょうか。

ところで、私が注目したのは、7 月 4 日に行われた英国の下院選挙です。これも、「下馬評」どおり、「保守党の敗退、労働党の勝利と政権復帰」という結果となりました。ここまでなら、多くの皆様がご存じのことだと思うので、少し掘り下げて書いてみようと思います。

多くの方はご存じだと思いますが、英国の下院選挙は、小選挙区制で 650 の議席を争います（First past the post といって、とにかく他の候補より、1 票でも多く獲得できれば勝ちです）。したがって、得票数が少し変わっただけで、結果が大きく変わります。実際今回の選挙においても、労働党は 412 議席（211 議席増）を獲得しましたが、得票率は全体の 33.7% で前回の選挙と比べて 1.7% しか増加していません。同じく今回の選挙で躍進した自由民主党も、72 議席（64 議席増）を獲得しましたが、得票率は全体の 12.2% で前回の選挙と比べて 0.6% しか上昇していません。

他方、敗北した保守党は、121 議席（251 議席減）となりましたが、得票率は 23.7% で前回の選挙と比べて 19.9% の下落です。保守党内で、様々なスキャンダル（コロナのまん延で英国国民が外出もままならない際に、ジョンソン首相（当時）が首相官邸でパーティを開いていた（いわゆる「パーティーゲート」）など）があり、大幅な得票率の減少を招いたのが、大きな原因であることは事実ですが、英国の選挙制度も保守党の大敗に大きく影響していることは事実です。結果として 5 議席の獲得に止まりましたが、右派のナイジェル・ファラージ党首が率いるリフォーム UK が 14.7% の得票率を得た（前回選挙と比べて、12.3% 増）ことも、保守党の不振に大きく影響していると思います。地域政党で見ると、保守党同様、スキャンダルと党内闘争を抱えたスコットランド国民党が 9 議席の獲得（前回選挙と比べて 39 議席減）となり、労働党がスコットランドでも議席を増やしました。

知り合いの英国人は、「今回の選挙は、労働党が勝ったのではなく、国民が保守党を罰したのだ。1997 年の下院選挙で労働党が大勝し、トニー・ブレア首相が誕生した時のような熱狂的な労働党支持はない。」と言っていました。全体の得票率が 59.9% で、前回選挙よりも 7.4% 減であることが、この見方を裏付けているような気がします。

ちなみに、英国では、伝統的に「保守党が強い選挙区」と「労働党が強い選挙区」があり、例えば、労働党の新人候補は、まず「保守党の強い選挙区」で立候補し、当選回数が増えてくると、「労働党が強い選挙区」に移る、といったことが行われるようです。親が国会議員をしていた選挙区を継承することの多い日本のシステムとはかなり異なります。また、英国の議員報酬は、1900万円ほどで日本の国会議員（議員報酬に文書費・立法事務費などを加えれば約4000万円、更に秘書給与も入れれば、6000万円以上）と比べてかなり安く、したがって、歳をとってまで議員を続ける人も少ないようです。

現在、英国は経済問題（インフレや貧困といった問題）や不法移民流入問題といった課題を抱えており、これをうまく処理しなければ、労働党に向かった国民の支持が失われる可能性があります。

次に、新首相であるキア・スターマー氏（Sir Keir Starmer）について、調べたことを書いてみます。キア・スターマー首相は、道具職人の父親と看護師の母親の間に生まれたごく普通の子供だったようです。社会派弁護士からイングランド及びウェールズを管轄する検察官のトップとなったキア・スターマー首相ですが、子供時代は「やんちゃ」だったようで、子供時代にフランス海岸で許可なくアイスクリームを売って警察に捕まったこともあるようで、「rebellious streak」（反抗的？）な子供だった、と BBC は伝えています。2014年には、長年の法律関係の業績が高く評価され、「Sir」の称号を受けています（knighthood）。

キア・スターマー首相は52歳になってから、ロンドン北部の「労働党の強い選挙区」から出馬し、初めて下院議員となっています（なお、同じ選挙で、保守党のスナク前首相も下院議員に初当選しています）。当時は、保守党政権が盤石であり、労働党が政権を奪還することは難しいだろうと思われていました。この状況を変えたのは、先ほど書いた「パーティーゲート」です。

キア・スターマー首相は、「Ruthless（非情？）」という評判を得ることもあります。キア・スターマー首相は、「労働党不遇時代」の労働党党首であったジェレミー・コービン氏（Jeremy Corbyn）を労働党から放逐し、労働党公認候補としませんでした（面白いことに、コービン氏は無所属で立候補し、労働党公認の候補を破って下院議員に当選しました）。

英国の話が大分長くなってしまいましたが、最後にもう一つ「Throne Speech」の話を付け加えたいと思います。日本では、国会が開会する際、冒頭で内閣総理大臣が、衆参両院において、政府の基本方針を述べる「所信表明演説」を行います。ところで、英国において、政府の基本方針を議会で演説するのは、首相ではなく国王又は女王なのです（Throne Speech）。

英国の首相官邸の Web site からダウンロードできますし、BBC など放映したものを YouTube で見ることもできます。私は初めてチャールズ三世陛下のお言葉をじっくりお聞きしましたが、日本人の私でもよくわかるはっきりとしたお言葉でした。冒頭「My government will govern in service to the country」とおっしゃったのを聞き、立憲君主国家の英国では「My government」なのか、と感慨深く思いました。

国王の演説は上院で行われるのですが、下院議員は、上院の警備責任者である黒杖官（Lady Usher of the Black Rod）の呼び出しを受けて、上院に向かいます。下院の独立を象徴する儀式として、黒杖官が下院の中に入ろうとすると、一度入り口が閉められます。そこで、黒杖官が杖で扉を三回たたき、開けてもらう、ということになっています。与野党の下院議員が上院議場に向かう際にはスターマー首相（与党第一党党首）と野党第一党である「国王陛下の野党」の保守党党首のスナク氏が肩を並べて歩き、ジョークも交わしていたようです（BBCによれば、スターク首相が青色の背広を着ていたことから、スナク氏が「いい色の背広を着ているね」と言ったそうです（ちなみに、保守党のシンボルカラーは、青色です。）。

その後、下院議場で初の与野党の論戦が行われます。面白かったのは、スナク前首相が、スターマー首相に対して、「政権をとって今はうれしいであろうが、直ぐに栄光は過去のものになり、44歳にして長老議員と呼ばれるようになる」と言って議場の笑いをとったことです（スナク前首相は44歳です）。こうした余裕のあるやり取りを、日本の国会でも行ってほしいものです。

このレターを書き終えた後に、英国下院において、スターマー首相とスナク前首相の最初の論戦を YouTube で見ました。

スナク前首相が、政策論争をする前に、パリオリンピックにおける英国選手団の活躍を期待するとして、以下の話をして、議場の笑いを取っていました。英国のジョークは、気が利いていますね。

I also join with the prime minister in his warm words about our Olympic athletes.

I've no doubt that after years of training focus and dedication, they'll bring back many gold medals, although, to be honest, **I'm probably not the first person they want to hear advice from on how to win.**